

山梨県中巨摩郡若草町

溝呂木道上第5遺跡

県道韋崎・櫛形・豊富線建設に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1998

若草町教育委員会
山梨県甲府土木事務所

序 文

若草町は、甲府盆地の西部、釜無川の右岸に位置し、町域には弥生時代後期から中世にいたる数多くの遺跡が古地して、古来から歴史豊かな町として知られています。

町内の加賀美地区には、鎌倉時代の始め頃にこの地域を治めた加賀美道光が居館を構えたとされ、20を越える塔頭を擁した名刹法善寺があり、また現在も年に一度行われる「十日市」は中世の繁栄を今に伝えるものといわれています。

このように現在も中世的空间が残る本町にあって、今回ここに報告する「溝呂木道上第5遺跡」からは鎌倉時代につくられたと見られる常滑焼の大甕や、同じく中世の所産と思われる茶臼や土師質土器が出土しました。今回の調査地点周辺は、むかしは寺院があったという伝承のある場所でもあり、これら遺物はこの施寺に伴うものである可能性もあります。

これ以外に今回の調査では、若草町でこれまで確認されていなかった繩文時代の終わりから弥生時代の始め頃の土器片も見つかり、本町の歴史が更に遡る可能性もでてきました。

若草町は県都郡府市のベッドタウンとして、また甲西バイパス、中部横断道の建設にともなって、今後ますます発展が期待される地域であります。しかしながらその反面、町が発展して行くなかで、本町に眠る多くの埋蔵文化財が影響を受けることも予想されています。今後、埋蔵文化財保護と開発について積極的に調整を図っていくとともに、町の歴史を明らかにし、広く公開していくことは我々の責務と考えています。本書が今後の研究の一助となれば幸甚です。

末筆ながら、調査にあたって御指導、御協力を賜った関係機関各位、並びに調査に従事された方々に厚く御礼申し上げます。

若草町教育委員会
教育長 萩野一郎

例 言

1. 本書は山梨県中巨摩郡若草町十日市場に所在する「溝呂木道上第5遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道並崎・櫛形・豊富線の道路建設事業に伴うものである。
3. 調査は、平成8年9月20日から同年12月26日にかけて行い、11月11日から11月29日までの中断を挟んで、実質調査日数は46日であった。
4. 遺物範囲は県教育委員会の試掘調査に基づき、用地買収の終了した部分から行った。今回の調査区の北東に残る木質収地は平成10年度に調査を行う予定である。平成8年の実質調査面積は1,454m²であった。
5. 調査は山梨県甲府土木事務所の委託を受け、若草町教育委員会が主体となって行い、発掘調査に従事したのは、以下の方々である。
飯室めぐみ・石川珠美・今村貞雄・大堀もとえ・小林五子・小林留雄・飯田進・真道みゆき・鈴木政一・千野正雄・福島祥子・保坂静夫・山本美恵子
6. 整理調査は平成9年度に行い、飯室・石川・真道・福島が参加した。
7. 本書の編集・執筆は田中大輔が行った。
8. 本書は掲載した地図は国土土地院発行1/50,000「甲府」「飯沢」、若草町発行1/10,000若草町全国である。
9. 発掘・整理調査に際しては以下の諸氏・諸機関に御教示、御協力を賜った。記して謝意を表する次第である。(敬称略・50音順)
出井洋文・小野正文・清水博・田代孝・中山誠一・新津健・三田村英彦・森原明廣・山梨県埋蔵文化財センター・山梨県教育委員会学術文化財課・帝京大学山梨文化財研究所
10. 本書に掲載する出土遺物に写真・記録図面類は若草町教育委員会において保管している。

凡 例

1. 遺構の縮尺は全体図1/400、遺構測量図1/80である。
2. 遺構断面図中の「279.7」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。
3. 掘岡中の北方はすべて真北である。磁北は6°10'西偏する。
4. 遺物の縮尺は古絵1/1、土器1/2、陶器・石製品1/4である。
5. 掘岡中の遺物番号と写真図版中の遺物番号は一致する。
6. 土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半1/4を切り取った状態で左側1/2に外面、右側1/2に断面及び内面を記録した。残存状況によっては遺物の中心を算出し、180°回転して作図したが、この場合は中心線を一点鉛線で示した。回転体にならない遺物の実測に際しては三角投影法に準拠した圖を示した。また、破片資料であるため推定径の算出不能な土器等、及び拓印図に関しては同様の作図に従った。
7. 遺物の欠損部分の復元に際しては、補強を半目的とし、遺物の保持に必要な部分のみをエポキシ樹脂によって補填するにとどめた。

第Ⅰ章 遺跡の立地と環境

本遺跡の立地する若草町は、甲府盆地の西部にあり、盆地を縦断して流れる釜無川の右岸に位置する。町域は日本最大級の扇状地である御動使川扇状地の扇央から南東端部、及び釜無川の氾濫原を中心に占地し、町域の平均勾配は、0.5° 程であって、北西部が高く南東部に向かって漸次低くなる西高東低の地形を有する。町内に山地は無く、町全体が極めて平坦であることが地形的特色といつてはできるが、一見平坦に見える若草町域も微視的にみれば、御動使川古扇状地、御動使川古扇状地上に形成された滝沢川の2次的な扇状地、土石流堆などの小扇状地上の微高地、釜無川の沖積低地など、いくつかの地形に分類することができる。

本遺跡（第2図-1）は、この内滝沢川小扇状地上の微高地から微高地に接する低地に立地するものと思われ、現滝沢川河道から北東に約200m、若草町域の西端に位置する。北東約100mには本遺跡とはほぼ時を同じくして櫛形町教育委員会によって調査の行われた枇杷B遺跡（2）があり、平安前半の堅穴住居址、掘建柱建物址が検出されている。

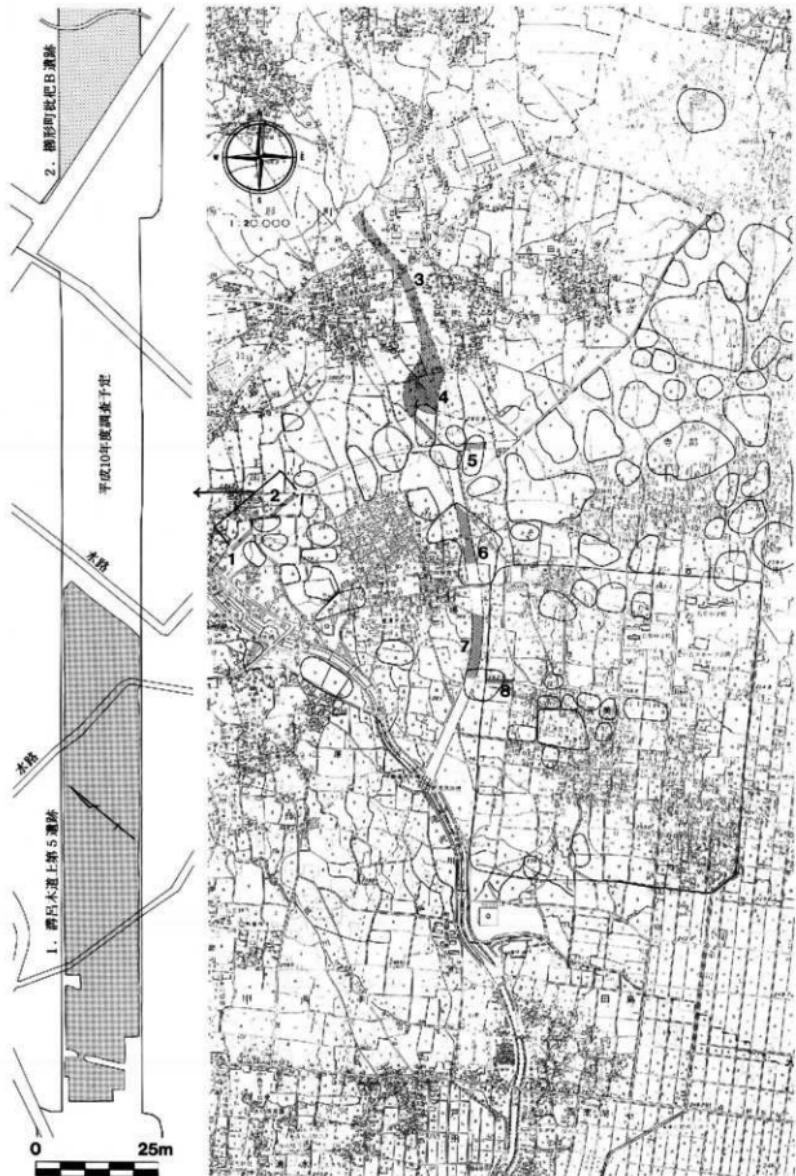
若草町には御動使川古扇状地扇端部を中心に、弥生時代後期以降の86箇所の遺跡が確認されているが、この若草町遺跡群の立地や、町内に存在する微地形に即した各時代の遺跡分布の特徴については保坂康夫氏の詳細な論考がある（保坂1990）。

町内ではまだ実際に発掘調査の行われた遺跡があまり多くないが、近年、甲西バイパス、中部横断道及びそのアクセス道路建設に伴って行われた調査として、中部横断道インターチェンジ建設に伴って調査され、隣接する櫛形町にまたがって古墳時代前期と平安時代の大規模な集落並びに弥生時代の水田とみられる跡が検出された村前東A遺跡（4）があり、その北側には弥生後期の方形周溝墓を中心に、弥生～古墳時代前期の住居址が検出された十五所遺跡（櫛形町）（3）が広がっている。これ以外にも、古墳時代前期及び平安時代前半の集落址が検出された角力場第2遺跡（5）、古墳時代後期～平安時代の大規模な集落址及び近代の粘土採掘坑が検出された新居道下遺跡（6）が調査されている。これら遺跡はいずれも御動使川古扇状地上に立地するが、滝沢川の2次的な扇状地上の微高地に立地する遺跡として、法善寺の子院の一つである中世寺院「福寿院」の寺域を調査した二本柳遺跡（農道）（8）、またこの微高地に接する低地から平安時代末の水田や戦国時代の水田・井戸・溝などが検出された二本柳遺跡（甲西バイパス）（7）がある。

また滝沢川小扇状地上には、微高地を中心に、その実施時期が奈良時代頃に遡る可能性が指摘される（保坂1990）条里型の方形土地割が残存している。若草町付近は、10世紀前半に成立したとされる『倭名類聚抄』にみえる巨麻郡、大井郷に属していたものとされるが、この条里地域を中心にして12世紀代には加賀美荘が成立し、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて加賀美遠光がこの地に拠点を構えて候西地方に勢力をもったとされる。因に今もこの条里型土地割の中に残る法善寺は遠光の居館跡といわれ、町内の十日市場地区で現在も年に一度行われる「十日市」の存在や二本柳遺跡で検出された中世の水田址の在り方などから、本町は中世的空間構成をよく残す地域であるという指摘もなされている（新津1997）。



第1図 若草町の位置



第2図 遺跡の位置

凡例

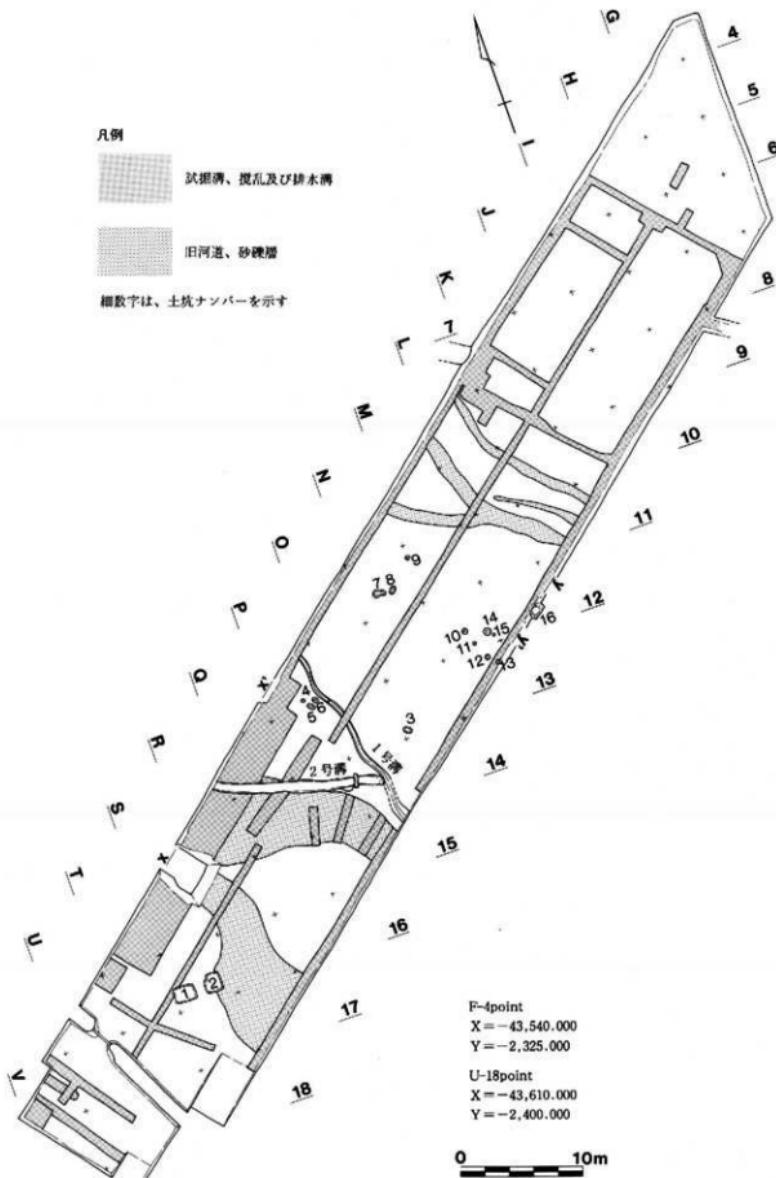


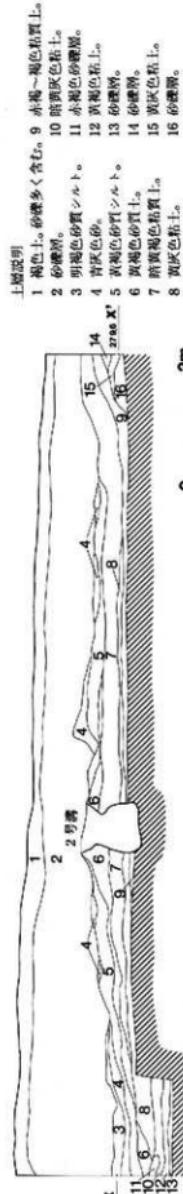
試掘溝、掻乱及び排水溝



旧河道、砂礫層

細数字は、土坑ナンバーを示す





第4図 調査区土層図

第II章 調査の方法と経過

今回の調査は中部横断道のアクセス道路である県道蘿崎・柳形・豊富線の建設に伴って、若草町教育委員会が山梨県甲府土木事務所の委託を受けたものである。

調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように国家座標第Ⅳ区系を用いて5mメッシュを基本とするグリッドを設定した。5mメッシュの各線（ライン）の名称は、南北に走る線を東から西にA・B・C・・・とアルファベットで、東西に走る線を北から南に1・2・3・・・と算用数字で表し、それぞれA-ライン、1-ラインなどと呼称した。またそれぞれのラインの交点を、（西へ並ぶアルファベット）-（南へ並ぶ算用数字）のように表して、A-1ポイントなどと呼称した。各区（スクエア）の名称はその区画の北東隅のポイントの名称をもってあてた。因に今回の調査区の仮想原点であるA-1ポイントの座標はX=-43,525.000、Y=-2,300.000となる。

今回の調査では、調査区外に排土置場を確保することが困難であったため、まず調査区北東半を調査し、終了後埋戻して調査区南西半を調査する所謂スイッチバック方式で調査をおこなった。調査区北東半では激しく湧水し、適宜排水溝を兼ねたトレンチを設定しつつ遺構の検出に努めたが、調査区壁で陶器窯の埋設された土坑（16号土坑）を検出した他は、洪水流跡とみられる砂礫層と若干の土坑・遺物を検出したに留まる。逆に調査区南西半においては2条の大きな洪水流跡を検出したものの殆ど湧水が認められず、後述する1・2号土坑と1・2号溝をそれぞれ検出することができた。各遺構の詳細は第IV章に譲る。

第III章 調査区の土層

今回の調査で検出された土層の内、第3図のx-x'の範囲を第4図に示した。表土及び厚く堆積した砂礫層の下に粘土、シルト、砂礫、細砂などからなる扇状地特有の複雑な堆積状況が看取される。これら堆積は北東から南西に傾斜して検出されるが、第4図に示した範囲では殆ど湧水せず、図示した土層の下に潜り込む16層以下から湧水するため、調査区北東半の湧水レベルはかなり高いものとなっている。正し、本遺跡の北東半に近接する枇杷B遺跡では殆ど湧水がみられず、本遺跡北東半部が地下水の通り道になっているような印象を受ける。

第Ⅳ章 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、土坑16基、溝2条と少ない。この内、1・2・16号土坑、1・2号溝については、以下に概要を示した。その他の土坑13基については、詳細な測量図は割愛したが、その位置は第3回調査区全体測量図に示した。また各土坑の概要は第1表土坑計測表にまとめた。

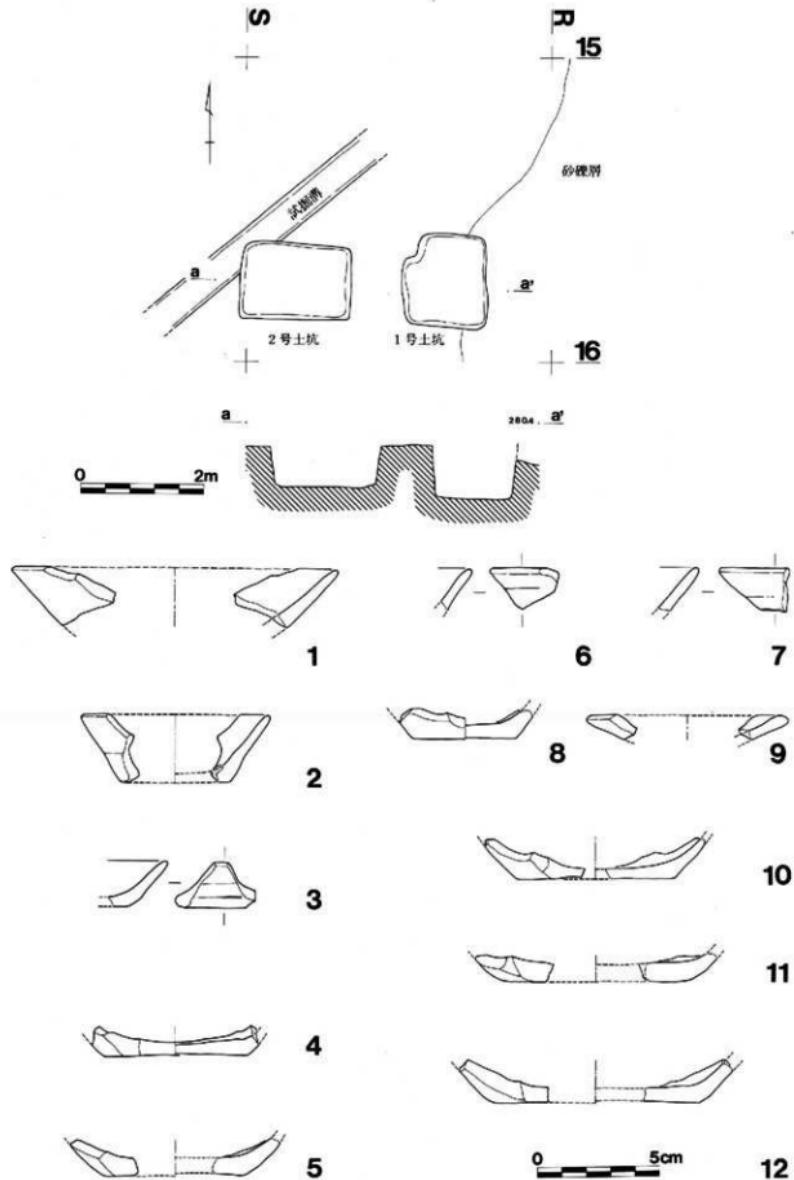
1・2号土坑

R-15区において近接して検出された。1号土坑は形状L字形を呈し、長辺1.53m、短辺1.42mを測る。底面は平らで周壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さ0.85m、底面標高279.15mを測る。2号土坑は、形状長方形を呈し長辺1.82m、短辺1.26mを測る。底面は平らで周壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さ0.61m、底面標高279.39mを測る。1・2号土坑とも覆土は径30~50mm程の砂礫を多く含む褐色土に占められ分層し得ない。

1号土坑からは約40片(130g)、2号土坑からは約70片(280g)程の土師質土器が検出された。全てが壺・皿など供獻形態を有す。いずれも小片のため図示し得るものは少ないので、第5図に12点図示した。遺物No.1~5が1号土坑、6~12が2号土坑出土の遺物である。何れも橙色~にじみ黄橙色を呈し、胎土には微細な砂粒や赤色粒子を含んでやや軟質な焼成を有する点で共通する。1は推定口径13.2cm、残存高2.4cm。2は推定口径7.5cm、器高2.3cm、推定底径4.4cm。3は器高1.9cm。4は推定底径5.8cm。5は推定底径5.8cm。8は底部径4.2cm。9は推定口径7.7cm。10は推定底径6.3cm。11は推定底径7.5cm。12は推定底径8.3cmをそれぞれ測る。

土坑番号	形状	規 模 (m)			底面標高(m)	覆 土	備 考
		長径	短径	深さ			
1	L字形	154	143	85	279.15	本文参照	土師質土器
2	長方形	181	125	61	279.39	本文参照	土師質土器
3	楕円形	78	52	12	279.45	黒褐色土	
4	円形	36	32	15	279.53	黒褐色土	
5	楕円形	63	37	9	279.59	黒褐色土	
6	楕円形	57	43	12	279.55	黒褐色土	
7	不整形	98	32	12	279.44	黒褐色土	切り合う2基の土坑か
8	楕円形	71	38	17	279.41	黒褐色土	
9	円形	36	37	6	279.47	黒褐色土	
10	円形	42	39	10	279.30	黒褐色土	
11	円形	29	27	10	279.36	黒褐色土	
12	円形	44	42	14	279.31	黒褐色土	
13	不明	—	—	17	279.07	黒褐色土	一部調査区外
14	円形	63	57	6	279.41	褐色土。砂礫多含	
15	円形	21	20	7	279.41	黒褐色土	
16	不明	—	—	89	279.21	本文参照	常滑大窯埋設

第1表 土坑計測表



第5図 1・2号土坑測量図・出土遺物

16号土坑

遺構及び遺物出土状況

K-11区において、調査区壁にかかって検出された。調査中の不手際により、重機によって調査区を掘削する際にその北西半を破壊してしまい、また南東半の一部は調査区外に出るため、規模・形状は不明である。検出位置は第3図に示した。また第3図y-y'ラインにおける調査区壁断面図を第6図に示した。16号土坑は第6図c-f肩を覆土とする上坑乃至溝をきって掘削されており、後述する常滑焼大甕が正位に埋設されていた。掘方と甕の間には一部空間が残る(第6図b肩)。肩~胴部の一部が欠損しているのは調査中の重機による掘削によるものだが、肩部以上は甕の内側に落ち込むような形で(上から押し潰されたような形で)検出された。土坑覆土、甕の内部とも他に遺物は検出されなかった。

出土遺物について

16号土坑に埋設された甕は常滑焼の大甕である。第6図に実測図を示した。実測図において肩部以上の断面形については、残存率の関係から 180° 反転したものを作成している。

口縁部の1/4、頸部の1/3、肩部の3/4程がそれぞれ残存し、以下はほぼ完存する。各部の計測値は、口径(推定)39.6cm、口縁部最大径(推定)40.7cm、胴部最大径63.9cm、底径16.9cm、器高59.2cm、器厚は0.8~1.3cm程で、底部付近で最大器厚1.7cmを測る。焼成は良好である。色調は外胴部にぶい赤褐色、口縁部は褐灰色~黒褐色を呈するが、肩部以上には、灰オリーブ色~灰白色を呈する自然釉が付着する。釉は殆ど光沢を有さない。内面は褐灰色~ぶい橙色を呈する。胎土はやや粗く、白色の微細な砂粒を多く含有し、断面の観察では、褐灰色を発する部分とにぶい橙色を発する部分がマーブル状に混ざって観察される。整形については、口縁部は横撫で、頸~肩部にかけては箆状の工具で斜位~継位に丁寧に撫でつけられる。肩部と胴部の境目も同様に箆状の工具で斜位~継位に丁寧に撫でつけられる。胴部も指撫で後、粘土紐の接合部を中心に箆状工具による斜位~継位の撫でがみられる。外底部は未調整。内面は頸部以上は横撫で、頸部~体部上半にかけては粘土紐の接合部分において指頭圧痕、指撫で痕が顕著に残る。胴部上半以下は、指撫で、指頭押圧後箆状工具による横位の撫でによって整えられる。

肩部には竹管を用いて施されたと推察しうる所謂窯印と思しき刻書があり、X印と竹管の断面を用いた亜円形の刺穴3点が確認される。頸~口縁部の割口の一部において漆絞ぎされた痕跡が観察される。

1号溝

N~P-11~14区で検出され、やや蛇行しながら調査区を斜めに横断する。主軸はN-15°-Wあたりを示す。2号溝に切られる。確認した深さは3~20cmと浅く、覆土は砂礫を多く含む暗い黄褐色土に占められる。底面標高はa-a'ラインで279.70m、b-b'ラインで279.69m、c-c'ラインで279.64m、d-d'ラインで279.53mをそれぞれ測り、北から南に向かって傾斜しているものと推察される。

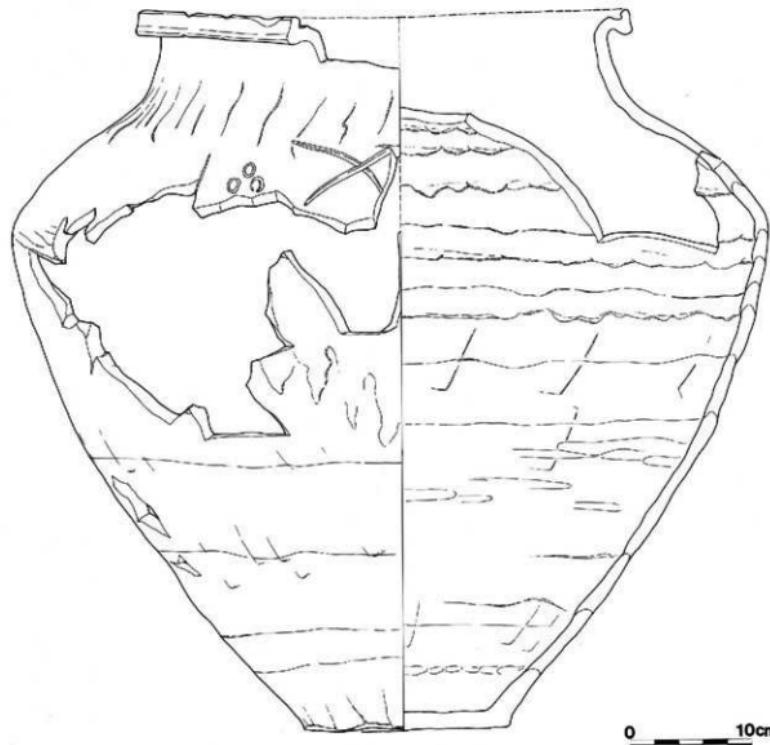
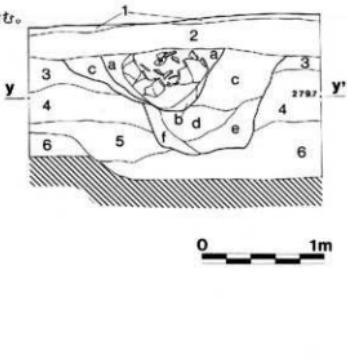
遺物の出土は見られなかった。

2号溝

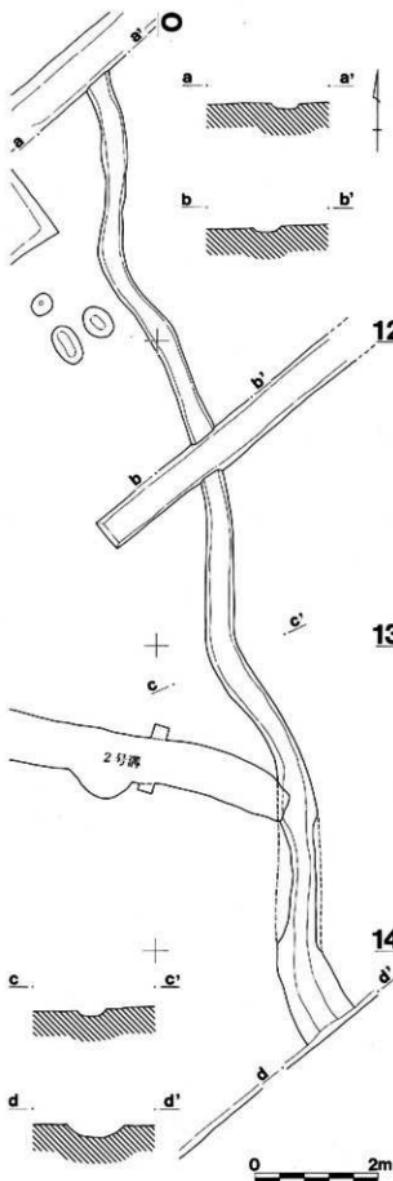
P-R-12区およびN-Q-13区にかけて検出された。主軸はN-70°-Wあたりを示す。西端は調査区外に伸びるもの、東端はN-13区においてとらえることができた。その東端で1号溝を切る。2号

土層説明

- 1 近年の盛土。
- a まったく縮まらない褐色土。砂礫多く含む。
- 2 褐色土。砂礫多く含む。
- b 空間。
- 3 暗褐色土。砂礫多く含む。c 暗褐色土。砂礫含む。
- d 暗褐色土。砂礫含む。
- 4 暗褐色粘質土。
- e 暗褐色土。
- f 暗い褐色粘質土。
- 5 黄褐色粘質土。
- 6 5層と砂礫の混和層。



第6図 16号土坑測量図・出土遺物



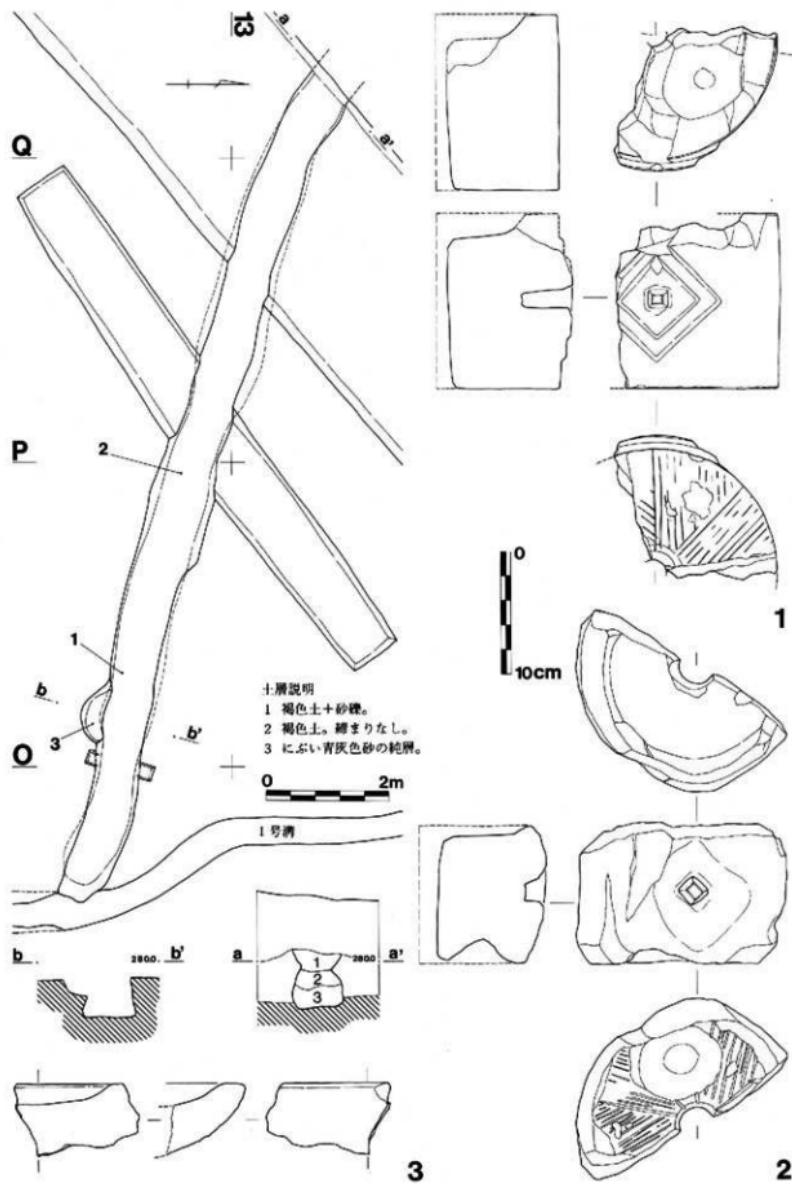
第7図 1号溝測量図

溝は基本層序2層の下面より掘まれるようで、掘込面からの深さは最大102cmを測る。断面形は両側壁中位がすぼまる瓢箪形を呈す。したがって側壁中位以下はオーバーハンプすることになる。底面はほぼ平らで、底面標高はその東端で279.21m、b-b'ラインで279.11m、13ライン上で278.93m、a-a'ライン278.81mをそれぞれ測り、東から西に向かって傾斜しているものと推察される。b-b'ライン付近に張出したテラス状の部分をもつが、土層の観察からは、この部分が2号溝と切り合う他の遺構である可能性は見いだせなかった。覆土は3層に分けられ、人為的に埋められたような堆積を示す。

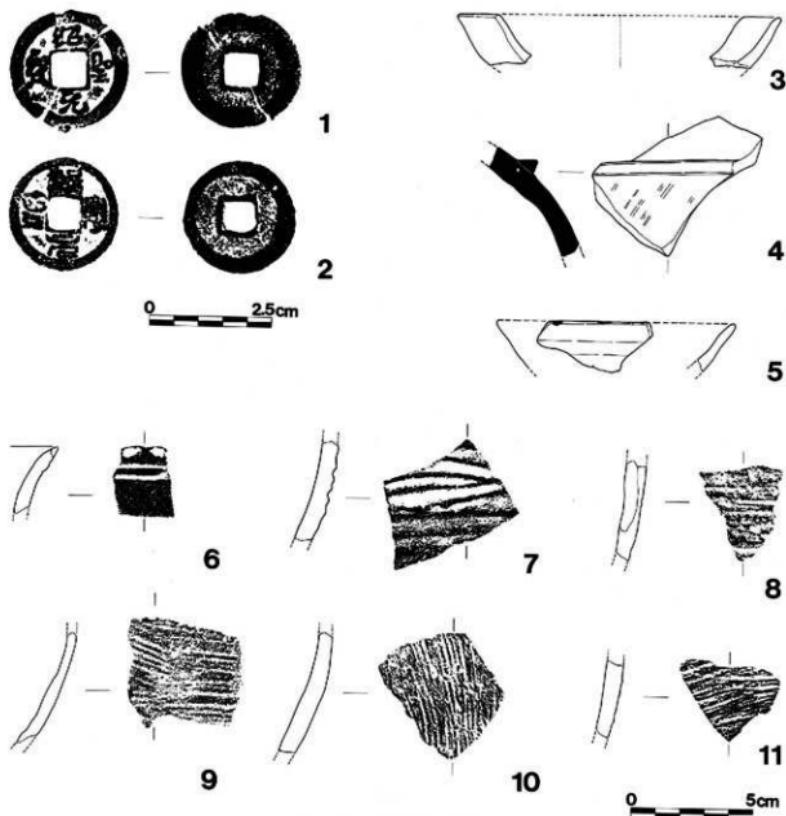
覆土から3点の石製品が出土している。1・2は茶臼になろう。何れも上臼で1は推定径20.2cm、高さ14.4cm。挽手孔には菱文が陽刻される。2は推定径20cm程で、残存高は11.7cm。3は茶臼の下臼の一部、或いは石製の鉢かと思われる。残存最大器厚3.5cmを測る。口唇部は1.6cm程の平らな面で平滑となっており、丸みを帯びて立ち上がる器形を有す。

遺構外出土遺物

1・2は古銭である。1は行書体の紹聖元宝(初鑄造年1094北宋)で外径2.3cm、内径1.9cm、厚さ0.8mmを測る。2は篆書体の熙寧元宝(初鑄造年1068北宋)で外径2.5cm、内径1.9cm、厚さ0.8mmを測る。3は所謂甲斐型土器の皿の口縁部破片で、推定口径12.9cm、残存高2.1cmを測り、色調は橙色を呈する。胎土は緻密で赤色粒子を含む。4は須恵器凸壺蓋の肩部破片で、残存高4.4cmを測る。色調は淡灰色～灰色を呈し、焼成は良くない。内面横撫で、外面には叩目が残る。胎土には微細な黒色粒子が多く含み、外面には自然釉の付着が見られる。5は土師質土器口縁部破片で、推定口径9.7cm、残存高2.0cmを測る。色調は橙色を



第8図 2号溝測量図・出土遺物



第9図 遺構外出土遺物

呈し、胎土には微細な砂粒を含む。口唇部には煤が付着しており、灯明皿としての使用が想起されよう。

6～11は、縄文時代晩期末葉～弥生前期の土器片である。6は口縁部破片である。口唇に指頭押圧による刻みが施され、口唇下には2条の沈線が横走する。色調は黒褐色を呈し、胎土には微細な砂粒を多く含有する。7は体部破片で浮線文が施される。色調は褐色を呈し、胎土は砂粒と共に橙色及び灰白色を呈するスコリア質の粒子を夥しく含有する。7は基本層序15層からの出土である。8は胴部破片で粗い条痕が横位に施される。色調は橙色を呈する。9は胴部破片で条痕を横位～斜位に施す。色調は橙色を呈する。器底の摩耗著しい。10は胴部破片で細かい条痕を縦位に施す。色調は橙色を呈し、胎土は大粒の砂粒を含む。11は胴部破片で条痕を横位～斜位に施す。焼成は良好で色調は黒褐色を呈す。胎土には微細な砂粒を含有する。

第V章 収束

今回の調査地点が立地する若草町は、古代巨摩郡大井郷に比定され、12世紀代には加賀美荘が成立した地域である。甲西バイパス建設に伴って発掘調査の行われた二本柳遺跡（中山1993b）では、戦国時代の井戸7基や区画構が確認され、そこが隣接する中世寺院跡「福寿院」（新津ほか1992）と一体となって、中世寺院とその周辺に広がる特殊な空間であった可能性が指摘されている。また付近には加賀美氏とつながる古刹法善寺や、中川から続くとされる「十日市」の開かれる十日市場なる地名もあって、若草町は中世的な空間構成をよく残す地域とされている（新津ほか1997）。このような本町にあって、今回の調査では中世の所産とおもわれる遺構・遺物を検出することができた。

聴取り調査によれば、今回の調査地点周辺は、滝沢川を挟んだ対岸、甲西町江原に現在も存在する曹洞宗寺院「隆昌院」の子院があったとされる伝承のある場所にあたる。しかしながら『甲斐国志』、『中巨摩郡誌』、『若草町誌』等にもそれらしき寺名は見えず、今回は時間的制約からそれ以上調査の手を広げることもできなかったため、その正確な寺域、寺名及びその営まれた時期などを明らかにすることができなかつた。今後の課題としたい。

今回の調査で特筆すべきは、中世常滑焼大甕が土坑に埋設された状態で検出された事であろう。第6図に示したこの大甕は、近年の研究では、生産地においては13世紀第3四半期に比定される形態的特徴を有している（中野1994）。常滑焼製品の消費地における出土例としては、まず経塚における経筒外容器や隨伴物の容器として出土する例が挙げらるが、経塚出土例以上に事例の多いものとして中世墓跡における出土例が挙げられる。中世墓跡出土例としては比較的小型の容器（壺・小甕）が多く見られるが、今回の出土例の如く上坑に大型の甕を埋設した例もよく見られ、これは死骸をそのまま納置したもので、土葬施設とされている。また、これ以外に常滑大甕の出土する例として、集落跡や城館跡から、多くは貯蔵容器として、また特殊な例として蓄銭容器として用いられたものがあるが（赤羽1984）、今回の調査において検出された大甕は、出土状況を鑑みれば、やはり埋葬施設としての使用を想定すべきであろう。

今回検出されたこれ以外の出土遺物の内、1・2号上坑から検出された土師質土器は、二本柳遺跡や並崎市大輪寺東遺跡（新津ほか1990）で15~16世紀または戦国時代の所産とされる遺物よりも古相を呈する形態的特徴を有することから、今回は中世前半の所産としておきたい。2号溝出土の茶臼は共伴遺物もなく判然としないが、中世の範疇で捉え得る遺物であろう。

以上、常滑焼埋設土坑の存在から、伝承どおりこの地に寺院が（少なくとも墓地が）営まれていた蓋然性はあると言えそうであり、その歴史は中世前半に遡り（正し、『甲斐国志』によれば隆昌院の創立は寛正4年（1463）とされる）、『甲斐国志』にそれらしき記載のないことは、『甲斐国志』成立以前に廃寺となっていたことを思わせるが、上記したとおり寺域、寺名及びその営業時期の推定を含め、今後周辺の考古学的調査や隆昌院への聴取り調査などを通じて、なお検討すべき問題であろう。

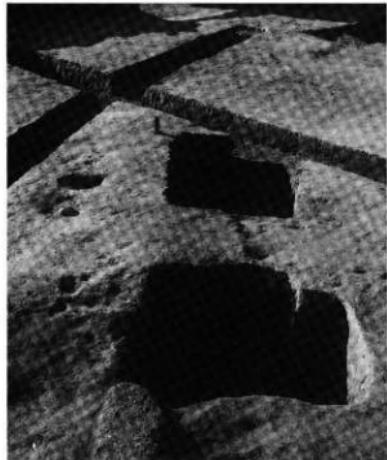
さらに、今回の調査では、縄文時代晩期末葉～弥生時代前期に比定される上器片を検出することができた（第9図）。該期の上器は本県においては中山誠二氏によって編年が試みられているが（中山1985・

1993b)、今回検出の遺物は氏の編年における甲斐0-(3)期の範疇で捉えることができそうである。氏の編年において弥生0期は縄文文化の解体と弥生文化の形成の過渡期的な性格を内包する時期に位置づけられている。前記したとおり若草町ではこれまで確認されている遺物の上限は弥生時代後期以降であり、今回はじめて弥生時代後期を測る資料が検出されたことになる。しかしながら陝西地方では近年、油田遺跡(甲内町)や八戸畠遺跡(柳形町)更に十五所遺跡、村前東A遺跡(何れも柳形町)などでも弥生時代後期を測る資料が続々と検出されてきており、今後陝西地方の遺跡の在り方を見直す可能性を秘めた遺物として注目して行く必要のある土器群であろう。

最後に、本文中では一々註を付さなかったものもあるが、本書を作成するに当たり、柳形町枇杷B遺跡の概要については清水博氏(同町教育委員会)、常滑壺については出代孝氏(県埋蔵文化財センター)、縄文晚期末葉～弥生前期の遺物については中山誠二氏(県教育委員会 学術文化財課)、土師質土器については新津健氏(県埋蔵文化財センター)、石製品については森原明廣氏(県教育委員会 学術文化財課)にそれぞれ御教示いただいた。記して感謝する次第である。

参考引用文献

- 赤羽一郎 1984 『常滑焼－中世窯の様相－』考古学ライブリー23 ニューサイエンス社
人井城跡発掘調査団 1986 『人井城跡(黒沢城跡)』 佐久市教育委員会
櫛原功・平野修はか1992 『宮の前遺跡』 萩崎市遺跡調査会はか
永井久美夫(ed) 1996 『日本出土銭鑑覧』1996年版 兵庫埋蔵銭調査会
中野晴久 1994 「生産地における編年について:『中世常滑焼をおって(資料集)』」日本福祉大学知多半島総合研究所
中山誠二 1985 「甲斐における弥生文化の成立」『研究紀要』2 山梨県埋蔵文化財センター
中山誠二 1993a 「甲斐弥生土器編年の現状と課題-時間軸の設定-」『研究紀要』9 山梨県埋蔵文化財センター
中山誠二 1993b 「二本柳遺跡」『年報』9 山梨県埋蔵文化財センター
中山誠二・三田村美彦はか1994~97『村前東A遺跡概報』1~4 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第90・103・112・134集
新津 健はか1990 『大輪寺東遺跡-中世城郭跡の調査-』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
新津 健はか1992 『二本柳遺跡-農道建設に伴う中世寺院跡の発掘調査-』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第72集
新津 健はか1997 『大輪寺東丹保遺跡I区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第131集
保坂和博はか1994 『油田遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第87集
保坂康夫 1990 「第III編 第1章 原始・古代の遺跡」『若草町誌』 若草町
森原明廣はか1992 『塩川遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第70集
米田明訓はか1994 『新居追下遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第89集
米田明訓はか1995~97『十五所遺跡』II・III 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第104・113集・第128集



1・2号土坑(東より)



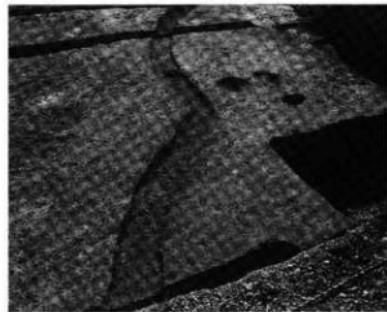
2号溝(東より)



調査区全景(南西より)

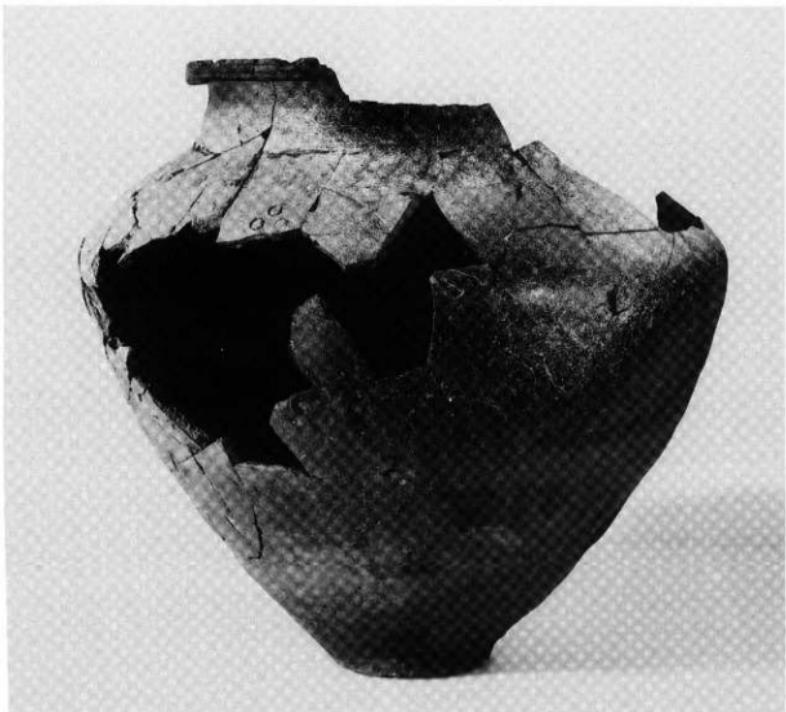


16号土坑(北西より)



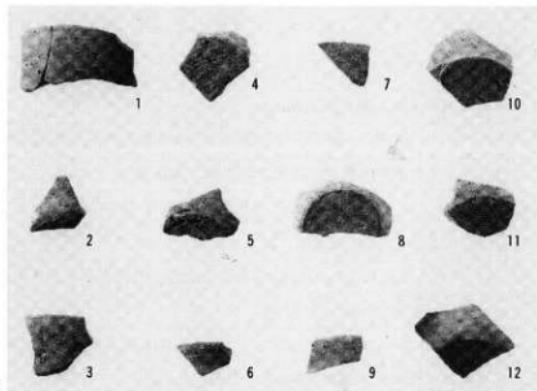
1号溝(北より)

図版 2

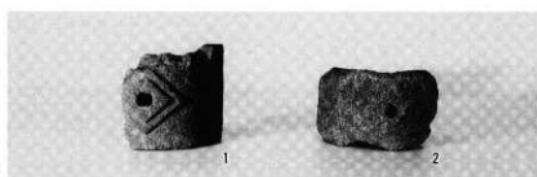


16号土坑出土遺物

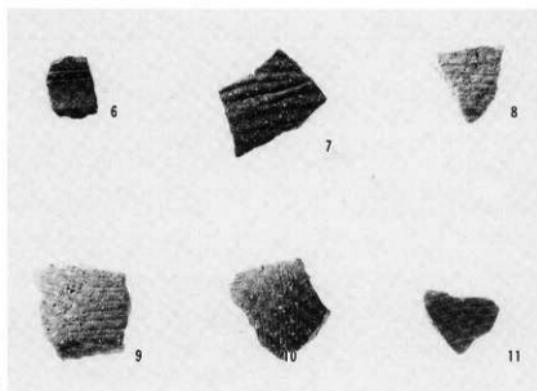
圖版 3



1・2号土坑出土遺物



2号溝出土遺物



造構外出土遺物



報告書抄録

ふりがな	みぞろぎみちうえだいごいせき	種別	寺院址推定地
書名	溝呂木道上第5遺跡	主な時代	中世
副書名	県道蘿崎・櫛形・豊富線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	主な遺構	土坑16基(常滑焼大甕埋設土坑含) 溝2条
シリーズ	若草町埋蔵文化財調査報告書 第2集	主な遺物	陶器(常滑)甕 土師質土器 石製品 古銭 繩文時代晩期~弥生時代前期 土器片 等
編著者名	田中大輔	特記事項	寺院推定地 土坑に常滑大甕が埋設 浮線文・条痕文土器片
編集機関	若草町教育委員会		
所在地	〒400-0337 山梨県中巨摩郡若草町寺部720番地 TEL 0552-82-3100		
発行年月日	西暦 1998年 3月10日		
ふりがな	みぞろぎみちうえだいごいせき	種別	寺院址推定地
所取遺跡名	溝呂木道上第5遺跡	主な時代	中世
ふりがな	やまなしけんなかこまくんわくさちゅうとうかくもば	主な遺構	土坑16基(常滑焼大甕埋設土坑含) 溝2条
所在地	山梨県中巨摩郡若草町十日市場	主な遺物	陶器(常滑)甕 土師質土器 石製品 古銭 繩文時代晩期~弥生時代前期 土器片 等
コード	市町村 19389 遺跡番号 41083	特記事項	寺院推定地 土坑に常滑大甕が埋設 浮線文・条痕文土器片
位置	北緯 35°36'26" 東経 138°28'26"		
調査期間	19960920~19961226		
調査面積	1,454m ²		
調査原因	道路建設		

若草町埋蔵文化財調査報告書第2集

溝呂木道上第5遺跡
県道蘿崎・櫛形・豊富線建設に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1998年3月10日発行

編集・発行 若草町教育委員会
〒400-0337 山梨県中巨摩郡若草町寺部720
TEL 0552-82-3100印 刷 ^(株)エンドレス
〒405-0014 山梨県山梨市上石森123
TEL 0553-22-4574